

やわらかな男のころ

森田高志

僕は高校に入学する直前になって、急に格闘技がしたくてウズウズしだした。血がひとりりで騒いで、僕の腕をワントンパンチのかたちにしたり、足をドタバタキックに振りあげさせたりした。僕はどうしても、その血の動きを抑えることができなくなつた。それを両親に相談すると、高校で格闘技の部活に入つたらいい、と簡単に言ってくれた。僕はガツカリした。あれだけ、考古学部に入りたいたいから受験するんだと言つて、そして合格した高校なのに、それをもう忘れてしまつたというのか？

僕は改めて、部活は考古学部、でもそれ以外に格闘技がしたいと、ワントンパンチのかたちを見せた。すると母が、それなら叔父さんに空手道場を紹介してもらえばいいと、また簡単に言つた。僕は、やっぱりと思つた。実を言えば、

ウズウズしだしてから、僕はその答えをずっと予想していたのだ。

母が言う叔父さんとは、母の妹の旦那で、小倉で蕎麦屋をしている。眼鏡をかけた物静かな人で、あまり会うことがないのに、その拳のタコだけは目に焼きついている。そのタコを初めて見たとき、まだ小学生だった僕は震えた。僕にはその丸く盛りあがつたタコが、人間のものには見えなかつた。そして何と言うか、テレビで憧れていた正義の味方、超人ヒーローみたいな人が本当にいるんだと思つた。タコは、その超人のシルシに見えた。そして僕も、もしかしたら超人になれるんじゃないかと、子供心に感じた。僕はすぐさま、叔父さんに訊いてみて欲しいと、母に頼んだ。母はその日のうちに、叔母さんに電話してくれた。



そして道場の住所と電話番号をメモして渡してくれた。タ
イミングがばっちり、道場は僕が通学することになる折尾
にあった。その道場は「V空手会八幡支部」で、叔父さん
が通っているのは小倉支部だそう。ただ最近、叔父さん
は店の方が忙しくて道場にはほとんど行けていないらしい。
だから僕が本気なら、八幡支部へ独りで行くように、とい
うことだった。

僕はそれを聞くと急に恐くなった。叔父さんがV空手の
二段だということは知っていた。だから叔父さんに道場を
紹介してもらおうということは、V空手を習うことだ、とい
うのもわかっていた。ただ僕をためらわせたのは、V空手
の怖ろしさだった。別名ケンカ空手と呼ばれるだけに、本
気で相手を殴り、蹴る。その荒ぶる恐怖の世界へ自分が
入っていく、いや、本当に入っていくのだろうかと思えた。
なぜなら僕は気が弱い方であったし、本来はテクテクと遺
跡を歩き、黙って古代に思いを馳せている方が性に合っ
ているからだ。

けれども動く血は、凍てつくところか逆にワクワクと騒
いで、いとも簡単に僕を恐怖の世界へ誘った。何と次の日
の夕方に、僕はV空手会八幡支部の前にいた。そこは折尾
駅西口からほど近いマンションの地下だった。一階部分に
ある駐車場の薄暗い奥に、道場への降り口があった。初め

僕は、おそるおそるそこを覗いた。すると、ムツとした汗
の臭いが鼻をついた。と同時に、犬が下からギャンギャン
吠えた。僕は驚いて、いったん外へ退いた。空手道場なの
に番犬かよと思いつながら、僕は再びそこを覗いた。すると
やっぱり犬が吠えた。しかし今度はすぐに人も顔を出した。
天然パーマが伸びたボサツとした髪に無精ヒゲ、紺のT
シャツにベージュのトレパン、腕も声も太かった。

「犬、だいじょうぶやけ、どうぞ」

「はい。入門希望なんですけど……」

僕は、いちおう来意を告げて、足早に階段を降りて鉄の
扉から中へ入った。入口横に下駄箱。その前に冷蔵庫とソ
ファー。カウンターがあって、その向こうに三十畳ほどの
空間が広がっていた。武闘の場……僕の心に浮かんだ印象
だった。その印象は空気となって、僕はその空気を香しく
吸い込んだ。

「中学生？」

無精ヒゲが軽く笑って言った。

「はい。いえ、四月から高校です」

僕は答えてから慌てて、

「Aという叔父が小倉支部にいて、ここを紹介してもら
いました」

と、叔父さんの名前を出した。

「おう、A先輩の？　そうか」

叔父さんの名前は絶大な威力で、無精ヒゲの態度を改めさせた。無精ヒゲは僕にソフアーを勧め、入門書類に住所・氏名を書かせると、真新しい空手着をいくつか持ってきて僕の前に置いた。そして乱暴にビニールを破り、清浄に畳まれたそれを広げて見せた。僕の目に飛び込んできたのは、左胸に縫い付けられた「V」の文字だった。僕は堪らずに立ちあがり、着ているトレーナーを脱いでいた。

「ちょっと大きめのやつがええよ。洗ったら縮むけな」

無精ヒゲは言いながら、僕の細い体を見ているようだった。道着を羽織り、道着下を穿いたあとで僕がまごついてみると、無精ヒゲは僕の手から白帯を取って、僕の腰に巻きつけ、最後に腹の前で締めあげた。

「おう、ちょうどええなあ。鏡で見ても」

そこで初めて僕は板張りの道場に出て、片側の壁一面に張られた鏡の前に立った。僕は僕を見て、自分の体が信じられなくなった。そこに映っていたのは、段ボールを切った作ったようなダブダブで不格好な衣装を着た少年だった。僕はまだ男ではなかったのだ。自分だけの目線にだまされて、男だと思ひ込まされていたのだ。僕は何だかガツカリして無精ヒゲを見た。そのヒゲも太い腕も眩しく見えた。

「今日から稽古してくんやろ？」

無精ヒゲ先輩は笑いながら、自分も道着を羽織った。道着は膨らんだ肉にシーツのようになり、まばゆい黒帯がそれを芸術のようにまとめた。僕は戸惑いながら見惚れていた。

やがて、一人また一人と先輩たちがやってきた。「押忍」という短い声が、僕を脅迫するように胸に響いた。僕は心細くなって、段々と道場の隅の方へ体をずらしていった。

不思議なのは、どの先輩も僕のことが見えていないかのように、黙って準備運動を繰り返していることだった。僕は、荒ぶる恐怖の世界がそこまで迫ってきていることを感じた。黙っている先輩たちが、その世界の入口に立つ門番のように思えた。僕は、胸の所で凍り始めた血を何とか温めようとして、その門番の姿を観察してみることにした。すると、パンチパーマの人がまだ白帯だったり、芥川龍之介のような人が茶帯を締めていることが、おもしろおかしく見えてきた。そのおかしみで、僕の血が静かに笑って温まった。

僕は少し余裕が出てきて、さっきから気になっていた道場の正面に飾られているものを真っ直ぐに見た。それはずっと僕のことを睨んでいるV空手会長G先生の写真だった。気迫というか殺気というか、それがヤスリで研いだような眼から光線のように出ている。僕は、まるで3D写真

のようだと思った。そう思ったとたん、飛び出してきた光線が僕の頭をクラクラと幻惑して、僕の心に虹を描いた。虹の向こうには、炎のように燃えるVの文字が見えた。僕は目を輝かせてそれを見た。胸は血と希望で痛いほど膨らんだ。

(G先生はチョー超人だ！)

僕は燃えるVに誓った。そして信じた。このチョー超人がきつと、僕を男に、そして超人に変えてくれるに違いない。その証拠は、僕の今までになく最高に騒いでいる血だった。

ドン！と太鼓が鳴り、号令がかかった。稽古が始まった。僕は正面に立つ無精ヒゲ先輩の姿を手本に、見様見真似で、柔軟運動から突き蹴りの基本稽古についていった。するとどうだろう。ここに来るまでに騒いだ血がさせていたワンツーパンチやドタバタキックのかたちがパリンと壊れて、新しい皮膚のような滑らかな動きが、僕の騒ぐ血を体の隅々まで流していった。僕の血は流れる喜びに大声をあげているようなので、僕も口から喚くように「ソリヤ」と大きく気合いを出していた。汗がどんどん吹き出して、体がジンジン燃えてきた。周りの先輩たちも燃えて、コンクリートの箱である地下道場はムンムンとした熱と蒸気の空間になっていった。

そのサウナのような空間で、地味な基本稽古が延々と続いた。僕のまつ毛から汗が雨滴のように垂れて、目に入って染みだした。道着の袖でぬぐって目を凝らすと、白い蒸気の粒が霧のように降っているのが見えた。すぐに垂れたまつ毛の汗が、ボンヤリと光の玉になって霧の中に浮かんで揺れた。僕は意識が薄らいで、夢見るように必死に手足を動かした。時々意識がはっきりすると、ゴワゴワしていた段ボール道着がふやけてしまった感じや、その下に穿いているトランクスパンツがベツタリと尻に貼りついている感じが、肌にはつきりと伝わってきた。たぶん、僕の体に保たれていた水分は半分以上湯になって、足の下に流れただろう。水が欲しい。乾いた口に入る塩っぱい酸素が、何となく美味しく感じる。声が出ない。苦しい。倒れそうだ。目の前に、青や黄や柄の明かりが点滅している。幻か……その時、ドンと太鼓が鳴った。ハツとして見ると、それは先輩たちの道着下に透けているパンツの色だった。ようやく、基本稽古が終わったのだ。時計を見ると、たつぷり一時間経っていた。

「はあふう、はあふう……」

息を弾ませて正座黙想しながら、僕は皮を一枚も二枚も脱いだような、清々した気分を味わっていた。無精ヒゲ先輩がつけてくれた空調の涼しい風も、堪らなく心地よかつ

た。苦あれば楽あり、なんていう人生観みたいな言葉も自然に浮かんできた。僕は薄目でチョー超人を見て、ヤスリではなく汗だと思った。たぶん、チョー超人は海ほども汗をかいて、自分の目や体を磨いたのだろう。僕は先輩たちの体から湯気が立ちのぼっているのを見て、そして僕の体からも出来たての料理のようにそれが立っているのを確かめて、嬉しくて堪らなくなった。

そのとき無精ヒゲ先輩が僕の名前を呼んだ。僕は慌てて目をつぶった。けれどもそれは、僕を咎めたわけではなかった。

「前で自己紹介。そして最後に押忍！」

その暗号のような命令に、僕の体はすぐに反応してドキドキする間もなく前に出た。汗に輝く二十人くらいの先輩たちが、懐中電灯のような光線を放って僕を見ている。僕はまだ豆電球カロウソクだろうと思いつながら、それでも目一杯に光線を放ってみた。

「Eです。遠賀に住んでいます。十五歳です。四月から高校です。……押忍！」

そのとたん、

「押忍！」

先輩たちの声が空気を震わせて、僕の周りで鳴り響いた。僕はジーンとして、口元を緩めながらお辞儀した。無精ヒ

ゲ先輩が僕の濡れた尻を叩いた。温かいものが僕の血に乗り組んで、グルグル体中を巡った。僕は今、門をくぐったのだ。荒ぶる恐怖の世界への探究が、これから始まるのだ。僕は、何でも来い、とやる気満々になった。けれども次に待っていたのは、道場の隅で拳の握り方から突き、蹴り、受けの基本を教えることだった。気持ち少しクルリと空回りしたけれど、やる気はそのままだった。僕の横で先輩たちは帯別に、動きながら突きや蹴りを繰り返す移動稽古というものに入っていた。僕はその方が気になって仕方がなかったけれど、自分のことに集中するようにした。

僕に付いてくれたのは、茶帯のM先輩だった。M先輩は素直に伸びた髪もサラサラで、目元も涼しかった。でも体はごつく、締めた茶帯は色が褪せてすり切れていた。V空手では入門者五百人のうち、一人だけが黒帯にたどり着けると、叔父さんから聞いたことがある。僕はM先輩の帯にV空手の厳しさを感じながら、そしてまた、叔父さんの凄さに驚きながら、たどたどしく基本の技を繰り返した。

移動稽古が終わるころ、僕は見学を命じられて隅の方に座った。無精ヒゲ先輩——ここらできちんと、N師範代と呼ぼう——が、

「スパーリングするぞ」

と言い放って、道場の空気がピーンと張りつめた。M先輩

や芥川龍之介先輩など黒帯・茶帯の方々が、心なしか青ざめた顔で対になって向き合い、戦闘態勢に入った。僕は納豆のように粘っこい唾を飲んだ。

ドン！と太鼓が鳴って、戦闘が始まった。緩やかな動きから突然、矢のように手足が行き交い、バチンと鈍い肉の音がした。僕は思わず拳を握って歯を食いしばった。

N師範代は、あつという間に芥川龍之介先輩を壁板に叩きつけた。芥川先輩はそれでも起きあがって、N師範代に向かっていた。その芥川先輩の体に、N師範代は容赦なく鉄拳の連打を浴びせた。芥川先輩は膝から崩れた。骨の浮いた胸が赤く染まって、脂のように血が滲んでいた。顔は苦しみで歪んでいるのに、覗き込むN師範代にまだ、振りしぼった笑顔を見せようとしている。僕はその笑顔に得体の知れない恐ろしさを感じた。

M先輩は、四角張って大きく、石碑のような体をした黒帯の先輩に立ち向かっていた。筋肉の塊がぶつかり合う迫力に、僕は腰を浮かせて身を引いた。二つの体が肉を詰めたドラムのように重い音を弾いて動き回った。M先輩は黒帯に負けていなかった。時々放つ回し蹴りが石碑先輩の顔の辺りを掠めた。石碑先輩はそのたびに、首を振って雄叫びをあげた。

僕は震えた。そして自分の体に縋りついた。けれどもそ

れは、あまりにも頼りない、この世界では何の役にも立たないものだった。僕は急に、何でここにいるんだろうと思った。僕をこの世界に誘った血は、人ごとのように冷たく固まってしまった。僕は心に、帰ろうかと訊いた。心は消えてしまった虹の向こうに、青い火でチロチロ燃え残っているVの文字を見せた。それは、チョー超人が僕にくれた信念に違いなかった。僕はそれを思い出した。そして今度僕の方から、血に動くことを命令した。血はそぞろに動いて僕に従った。僕はこのとき、たった一時間半ちよつとで、一ミリほど男に近づいたような気がした。

スパリングが終わると、仕上げの強化運動が待っていた。腕立て伏せは、掌ではなく拳を突いてやる拳立て伏せだった。僕は十回がやっとだった。腹筋と背筋は五十回ずつ。これは何とかごまかしながらやった。相手に足を持つてもらおう逆立ち、体中真っ赤になってヨダレまで垂らして、一分間何とか崩れるのを我慢した。最後の基本稽古、僕の筋肉はブルブル震えて、突くことも蹴ることも、まともにはできなかった。それでも太鼓が鳴って、はあふう息をしながら、G先生の写真下に掲げられた道場訓を、

「一つ、我々は！」

と、先輩たちの声に合わせて怒鳴ると、

(終わったんだー)

という喜びと満足感が、泉のように湧いた。

先輩たちは、稽古が終わってもすぐに帰ろうとはしなかった。サンドバッグを叩いたりバーベルを持ちあげたり、型の練習をしたりしている。僕も何となく帰りづらくて突っ立っていると、

「おい、もう帰ってええんぞ」

と、N師範代が声をかけてくれた。僕はお辞儀をして道場から離れ、階段下の洗濯機が置いてあるコンクリートの土間で、トレーナーに着替えて、濡れた胴着をクルクルと畳んだ。白帯は隠すように間に入れた。

「おい、また来いよ。帰るときは、押忍！ 失礼します！ だぞ」

N師範代の太い声に、先輩たちの顔がみんな僕に向いた。どの先輩も、何だか僕を慈しむような顔をしている。僕は頭をさげて、

「押忍！ 失礼します！」

と、元気に言った。

またギャンギャン犬に吠えられながら階段をあがると、胸にスウーと外の空気が入ってきた。僕はひとりで笑って、すっかり暗くなった街をゆっくり駅へ歩いた。途中の自販機で五百ミリのお茶を二本買って、立て続けに飲み干した。喉に注ぎきれなかったお茶が口から首筋を伝って、鎖骨の

所でヒンヤリ止まった。大きな溜息が三回も出た。

折尾駅から鹿児島本線に乗って海老津駅まで、僕は道着を脇に抱えて立っていた。びっしり濡れたパンツだけが気持ち悪いけれど、心にはまた虹が架かっていた。そっと手を見ると、拳の所が少し赤くなっている。拳立て伏せの名残だった。たぶん明日になれば、すっかり消えてしまうだろう。でもこれは、僕についての初めての超人のシルシだった。僕は周りの人たちを見て、胸を張るように背筋を伸ばした。何か誇らしげな気持ちだった

海老津駅に着くと、僕は家まで走った。笑っていたので長い坂も苦しくなかった。家の中に走り込むと、心配した母が飛びついてきた。けれども父は、僕が抱えている道着を見てニヤリと笑った。

一週間経った月曜日、高校の入学式があった。その間に僕は、道場に一回行った。

道場での稽古は週に四回ある。そのうち月・木は一般部、火・金は壮年部と少年部に分かれている。僕は取りあえず、一般部の稽古にだけ行くようにした。でもそのたった二回の稽古で、僕の体は変化しつつあった。それはひどい筋肉痛となって現れた。何しろトイレに入って便座に腰かけるのにも、歯を食いしばってたっぷり一分もかかるほどだった

た。でもそれは、体が膨らむぞ、という嬉しい変化の叫びに違いなかった。僕はもちろん、その叫びを聞いて弾けるように笑っていた。

そんな体だったから、新しい詰襟の学生服は鋼鉄の鎧のように重かった。家から海老津駅、そして折尾駅東口から高校まで、僕の足は着物姿の母に後れを取った。

折尾駅周辺には大学や高校がいっぱいあって、この日は僕みたいな新入生が色んな制服でウロウロしていた。知っている顔もいくつかあった。僕の中学からは三人、同じ高校に入学することになっていた。一人はバレーボール部の部長だったHで、生徒会長をやるほどの人気者だった。でも彼とは一度も同じクラスになったことはなく、だから話したこともなかった。もう一人は茶道部の部長だったKで、彼女とは三年生のときに同じクラスになった。しかもずっと僕の前の席で、僕が授業中に彼女の背中をシャーペンで先でつついてからかったりするほど、仲が良かった。だから彼女とは、進路についてもよく話した。でも同じ高校になったのは、全くの偶然だと思う。少なくとも彼女の方から見たら……。

遅れて式典のある講堂へ入った母と僕は、一番後ろのイスに座った。僕はやはり座るのに時間がかかった。おまけに校長や来賓の挨拶のたびに、起立、礼、着席、と言われて、

拷問かよ、と口パクで叫んでしまった。どうしてもワンテンプオ遅れる僕に、母は何も言わずに合わせてくれた。お陰で僕だけが目立つことなく、感じる恥ずかしさも妙な愉快さに変わって、クスリと笑ってしまった。

僕は会場を見渡して、Kの姿を探した。ストレートのきれいな黒髪を肩の上で切り揃えていたKの後ろ姿。毎日間近に見ていた僕の目には、その姿が焼きついている。

僕は前から三列目に、訳なくその姿を見つけた。ただ、少し髪が伸びて肩に届いていた。僕は見る事ができなかったその一センチほどの月日を、悲しく思った。その一方で、探す気はなかったのに、Hの姿も目にとまった。僕より十センチ以上も背の高いHは、座高もあって目立った。僕は、Hと一度話してみたいと前から思っていた。彼には好印象を持っていたからだ。たぶん、これからそのチャンスがいずれあるだろう。

苦痛を感じた式典もやっと終わって、帰り際にクラス表をもらった。一年一組に僕の名前があった。そしてKの名前も、驚くことにHの名前さえあった。歩きながら母が、「よかったやない、三人とも一緒で」

と、はしゃぐように言った。僕も嬉しさを隠さなかった。Hが一緒だったことで、僕の嬉しさの正体が母にばれる心配はなかった。少しHに感謝した。僕は後ろが気になって、

時々振り返った。けれどKの顔もHの姿も見えなかった。

折尾駅前に来ると、母はしみじみと、

「折尾の駅舎って、薄紅だったんやね」

と、つぶやいた。そして、

「うすべにのーこすもすがーあきのひのー」

と、口ずさんだ。僕は、

「ピンクやろ、それに今は春やし」

と、せせら笑った。

「思い出があるんよう」

と、母は微笑んだ。そう言えば母も、大学時代はここに通っていたらしい。僕は母の思い出が少し気になったけれど、すぐに忘れた。

博多方面のホームにある長い——十メートルくらいある——白い木のベンチに、母と僕は座った。このベンチは壁に作りつけてあって、座る位置が高い。普通に座っても、僕の足は爪先までしか地面に届かなかった。母は完全に浮いた足を、足袋と草履なのに、はしたなくブラブラ動かし、僕は舌打ちして、母から目をそらした。

向かい側ホームの先、線路の土手にサクラが咲いていた。その花は眩しいくらい白く見えた。僕は母の思い出のことを考えた。母は、折尾の駅舎を白だと思っていたそうだ。本当はピンクでも、日が当たったり遠くから見たりしたら、

サクラの花のように白く見える。僕は、母の思い出のことを訊いてみようかと思った。すると母が、

「この駅がなかったら、あんたは生まれてなかったかもしれんね」

と、明るく言った。僕は戸惑った。母の思い出は、僕に関係があるらしい。それで急に、気軽には訊きにくい気分になった。そこへちょうど電車が来たので、僕は結局、母の思い出を訊きそびれた。母の思い出は白いイメージで僕の記憶に残った。僕はこの日、また折尾駅まで来て道場に行った。

僕の席はKの後ろではなかった。それどころか教室の隅と隅、対角線が引ける一番遠い所に離れてしまった。Kの後ろはHだった。

僕はちようどいいチャンスなので、Kと話すついでにHとも話してみようと思った。二人の所へ近寄ろうとしたとき、HがKの肩を叩いて話しかけるのが見えた。僕はそれを見て、気をそがれてしまった。僕は自分の席へ引き返して、二人の姿と窓の外と、せわしく視線を動かした。

放課後の帰り道、僕は独りで歩いているKを見つけた。僕はドキドキしながらカバンの角で彼女に触った。彼女は振り返って、前と同じように笑ってくれた。僕らは一緒に

歩いて行った。そして駅のホームの、あの長いベンチに座った。彼女は白いソックスの足を浮かせて、かわいらしくブラブラ動かした。

「E君、考古学部に入るんやろ？　うちも入ろうかなあ……」

彼女は足の動きを止めて言った。

「え？」

僕はびつくりして、心臓が止まりそうになった。彼女が僕と同じ高校に入ったのは、偶然じゃなく必然だった？　……僕の心臓は、今度は爆発しそうになった。

「H君、空手道部に入るんやって。うちの学校、三年連続で全国大会優勝やって。すごいね。H君なら、やれるよねえ」

彼女はまた、足をブラブラさせた。僕の心臓は爆発を忘れて、脂汗をかいた。初耳だった。そんなに強い空手道部があったなんて。しかもHがそこに入部するなんて……。

「E君、歴史のテスト、いつも百点やったもんねえ。うちにも石器の種類とか、病氣と闘いながら研究した偉い先生の話とか……」

「直良信夫博士？」

「そうそう、いっぱいしてくれて。その頃からうちも、考古学とか興味が出てきて、高校入ったらそういうのやりた

いなーって」

僕はうなずいて黙っていた。本当は跳びあがりたいほど嬉しいのに、その嬉しさを水で薄めるものがあつた。僕より遙かに大きい体を空手着に包んだHが、凜々しく立っている姿が思い浮かんだ。

「どうしたん？　黙って。性格暗くなった？」

彼女は僕の顔を覗き込んだ。僕は笑って、指で彼女の鼻を弾くふりをした。彼女は悲鳴をあげて弾けるように笑った。

僕は彼女のことだけを思うようにした。もともと考古学部と空手は別々に考えていたのだから、Hのことなど関係ない。彼女と考古学部で楽しくやって、空手は空手で、自分ひとりで精一杯努力すればいいだけのことだ。

僕は彼女に話したくて、何層にも積み重ねておいた気持ちを、下の方から順繰りに話していった。ただ、V空手を始めたことだけは、どうしても話せなかつた。彼女はずつと、僕の話聞いてくれた。僕らの前を、幾つもの顔を窓に貼りつけた電車が、何回も同じように通り過ぎていった。

四回目の稽古で、僕は初めて移動稽古に加わった。段ボールだった道着も和紙くらいに柔らかくなって、ごくわずか膨らんだ僕の体に馴染むようになってきた。拳立て伏

せは十五回まで伸びて、最後の基本稽古でも突き蹴りが訳なく出るようになった。

そして僕はこの日から、先輩たちに混じって自主トレに残った。いきなりサンドバッグを叩くのは恥ずかしいので、先輩たちの真似をして、鉄柱に布を厚く巻いたマキワラを、左右の拳で突いてみた。衝撃が骨にビーンと響いて、拳が段々と熱くなってきた。百回を過ぎたところから、熱さが痛さに変わってきた。布に赤い血が点々と付きだした。僕は突くのをやめて拳を見た。拳は赤く充血して皮がめくれていた。そして粘液と血が、めくれた所からジワリと滲み出していた。それを横から覗き込んだM先輩が、

「そうやって何回も皮が破けて、固いタコになつていくんだ。でも無理すんな。カサブタが取れたらまたやればいい」と、にこやかに言った。僕は、

「押忍！」

と返事して、ヒリヒリする拳を握った。

固いタコに——というM先輩の言葉がキラキラと輝いて、いつまでも目の前に浮いていた。それは超人のシルシ。そのシルシができる予定の所から滲んでくる血を、僕はじつと見た。超人に憧れたのは、そもそもこの赤い血だった。憧れたそれを自分で創ろうなんて、なかなか偉いぞ、と僕

は思った。

血は建設を急いで、簡単には止まろうとしなかった。僕はティッシュでそれを拭きながら着替えた。犬は僕のシルシもどきを恐れたのか、いつものようには吠えなかった。家に着いて母に血を見せると、母は急いで救急箱を持ってきた。僕が手を引っ込めると、母は恐い顔で追ってきた。すると父が間に入ってきて、

「だいじょうぶ、ケガじゃないんやけ。すぐにカサブタになるけ、ほっとけ」

と、母を抱きとめた。父はそれから僕を見て、またニヤリと笑った。母は外人のように両手を広げて、僕を追うことを諦めた。

次の朝起きてみると、血はオレンジ色のアメのように固まっていた。僕はベロでそれを舐めてみた。まずい、塩っぱい味がした。

僕は電車に乗ると、わざと両手で吊革に掴まった。このシルシもどきを皆に見せびらかしたかった。僕は注がれる視線を感じて、独りで熱くなって汗をかいた。

学校に着いてからも、僕は両手を机の上にダラリと載せておいた。僕が、

「おはよう」

と声をかけると、皆は、

「おはよう」

と返すだけで、誰も僕の手を見ようとはしなかった。対角線に座っているKも、何かの本を熱心に読んでいた。僕は席を立って、Kの所へ歩いて行つた。そこへ急に廊下からHが現れた。Kは視線をあげてHを見て、キャツと声をあげた。

「血が出るる！」

誰かが叫んだ。横着に椅子へ座り込んだHの周りを、すぐに皆が取り囲んだ。僕も後ろの方からHの姿を覗き見た。

「どうしたん？ H君。だいじょうぶ？」

「うん。朝練でちよつと。だいじょうぶ」

Hは血に染まった右の拳を、タオルでペタペタと拭いている。瞬間的に、僕は自分の拳をこっそりズボンのポケットへ押し込んだ。

「こんなに血が出るなんて、空手道部なんかやめといった方がええよ」

誰かが言つて、そうだと皆が声を合わせた。Hは黙っていた。皆の隙間から、心配そうに手を合わせているKの姿が見えた。

僕はポケットの中で両拳を握つた。

（そんなもん、すぐにカサブタになるけ、ほつとけ！）
僕は胸の内ですうつぶやいた。もしKがいなかったら、

もしHと一回でも話していたら、僕は皆の間に割り込んで、笑いながら自分の拳を見せびらかしていたら。僕のシルシもどきは、もう盗んできた宝石みたいに寂しいものになつてしまつた。そして僕の気持ちも悲しいものになつてしまつた。

Hは毎朝、拳から血を流して教室に入つてきた。そして皆が、ヒーローを迎えるように彼を囲んだ。僕は独り、醒めた目でそれを見ていた。僕のシルシもどきは変色して固いカサブタになつて、目立つものになつてきた。それを僕は見られぬように隠した。

放課後、Kが僕を呼びとめた。僕はカバンを肩に背負つて、両手をポケットに入れて歩いた。

「E君、いつ入部届出す？」

僕はドキリとした。返事が急には出なかつた。黙つて僕に、彼女は言つた。

「それが一回、見学に行つてみる？ 確か部室は、図書室の近くだったよね？」

僕はやつと、

「そうやね」

と、相槌を打つて彼女を見た。彼女は僕に微笑み返して、
「じゃ、明日の放課後、約束ね？」